

オスティア：歴史的・考古学的側面（概略）

アンジェロ・ペッレグリーノ Angelo Pellegrino

ローマ時代にオスティアが発展した土地の景観は、現代のそれとは大きく異なっていた。

実際、テヴェレ川は、かつては居住区の北側に沿って流れていたが（現在の囲い地のラインにはほぼ一致する）、現在では川の流れはより下流に移動している。実際、1557年の破壊的な洪水によって、河床は下流に引っ張られ、約500m西に蛇行した。

都市（オスティア）の南に面していたテヴェレ川岸もまた、今日ではその遺跡より約4キロ離れている。これは、20世紀の間にテヴェレ川によって河口付近に運ばれ堆積した土砂や瓦礫によって、陸地化が徐々に進んだためと証明されている。

つまりは、ローマ時代には、今日と異なり、オスティアが海と川の両方と直接つながっていた都市であったことを頭にいれておく必要がある。この2つの要素は、その幸運と繁栄とを決定づけた。実際、紀元前8世紀から紀元前7世紀にかけて、西方と近東のあらゆる諸国からの船が地中海を縦横に行き交う一方で、古代世界の川の道は、陸地の同様な道よりも主要な交易路とみなされていたのである。

前293年から前169年の間に生きた詩人エンニウスからはじまり、古代の諸史料は一貫して、オスティアの創建が第四代目のローマ王、アンクス・マルキウス（前640ー前616年）時代に遡るとしている。この帝王がテヴェレ川の河口にローマ市民の植民地を建設しようとしたのは、その地域の塩田を最大限に活用するためと、テヴェレ川の対岸（左岸）に位置したエトルリアの都市ウエイイに対し、テヴェレ川の河口に軍事的に駐屯させるためでもあった。

しかしながら、それまでもっばらギリシア人やフェニキア人またはエトルリア人らによって取り仕切られていた地中海の海上交通網に、この時期ローマが参入しなかったのだから、交易上の動機もまた事欠かなかったはずである。

もっとも、この局面の考古学的証拠は僅かで断片的であるため、アルカイック期のこの小さな都市の正確な立地について知ることはまだできない。

続く帝政時代に市民に集団としての自覚が生まれるまで、このような確信は根強く、ローマのある曆によれば、オスティアは最初のローマ植民地のごとく記録されており、オスティアのある碑文の中には、この都市の最初の建設者、アンクス・マルキウスの名が言及されている。

共和政時代

最も古い局面に関する考古学的証拠は、はっきりと、紀元前4世紀初頭にしかはじまらない

ことを示している。紀元前 396 年、ローマ人たちはウェイイを征服し、テヴェレ川の低いデルタ地帯（平野、湿地）におけるその支配を強固にするため、続いて河口付近に小さな要塞、慣例的な呼び名である（正確にはないにせよ）カストルム（*castrum* 城塞）を建てた。この城塞は、ギリシアやとりわけシラクサ人たちによる海からの侵攻の脅威——中でも紀元前 384 年にピュルギ *pyrgi* 付近で損害をもたらした恐ろしい略奪が有名——に晒された沿岸地帯に駐屯する目的があった。小さな要塞の建設は、紀元前 4 世紀末に遡り、海軍の二人委員（*duumviri navales*）という異例の軍事司法官設立とほぼ時を同じくした。これは、小さな規模（193.94 × 125.70 メートル）の城塞のことで、この時期用いられた造壁法（たとえば、ローマの共和政時代の壁にみられる）、凝灰岩製の大きなブロックを用いた城塞であった。

ともかく、確実に、この地域には、以前から、壁で築かれた防衛用の建物はなくとも、砦（駐屯部隊）が存在したはずである。

真の植民地建設は、テヴェレ河口の小要塞建設の何十年も後を待たなければならないにしても、通常は、このカストルム（*castrum* 城塞）が、ローマ植民地のこととみなされている。共和政時代半ばは、ともかくこの植民地の軍事的機能が常に中心を占め、紀元前 267 年以降は、オスティアに宿営した艦隊の財務官 *questori* の 1 人がよく知られているように、対ハンニバル戦の重要な役割を担う、ポエニ戦争時代の海軍の主要拠点となった。このようにして紀元前 217 年にスペインで従事するローマ軍隊に（援軍を）供給するために諸船が出航し、紀元前 212 年に、ポエニ戦争に従事するローマ部隊への配給用の穀物がサルデニアからオスティア港に到着し、紀元前 211 年には、アフリカの大スキピオが、彼の 30 名の五段櫓船と共に、アフリカのカルタゴ軍にとどめを刺すべくアフリカへと錨をあげた。しかしながら、その後、地中海の制海権を得た紀元前 2 世紀半ば以降は、当然の成り行きとして、オスティアはより明確に商業的な役割を担うようになった。このようにして、かつての要塞化された居住地は用をなさなくなり、そこに沢山の商店が軒を連ね、川港から荷揚げされて来る商品を保管し、販売した。これらの商品の中には、歴史史料からわかるように、明らかに（そして何よりも）穀物があったはずである。

先に触れた川の寄港地については、現在まで発見されていない。いずれにせよ、オスティア居住区の北側の境界線、ローマ時代にはオスティアの北側にぴたりと沿って流れていたテヴェレ川左岸の波打ち際に、広がっていたに違いない。実際には、一種の港—運河のようなものを形成しており、碑文史料からナヴァリア（*navalia* ドック）と定義された戦争から緒船を匿う部外秘区域を有していた。紀元前 2 世紀末にむけて、ローマ法務官（*praetor*）カニニウスによって、港湾活動の機能専用の公共区域とするため、その都市（オスティア）の北側に沿った一帯は、建造物の設置禁止帯に制定された。都市ローマの司法官によるこの直接介入によって、その小都市の行政が、明らかに、供給物の販売を管理する重要さのため、完全なる自治を謳歌できなかったことが瞬時に理解できる。エンポリウム（商業地）はこの際立った特徴に加え、テヴェレ川の向こう側にも広がっていた。実際、港湾地域はテヴェレ川のかつての蛇行によって境界を画された細長い地域（その後 1557 年の洪水によって消滅した）に面していた。近年の調査によって、正真正銘のトランスティベリーノ（テヴェレ川向こう）の存在が裏付けられ、「トラステヴェレ・オスティエンセ（オスティアのテヴェレ川向こう）」とまさに相応しい呼び名がつけられた。そこには、とりわけ倉庫や河川航行に関わる構造物がひしめきあっており、

このため、極めて商業に適していたことが明らかである。

共和政時代の最後の世紀の前半、この都市に壁が備え付けられた。その造壁法は定かではないが、テヴェレ川に面した北側を除き、全側面に建てられた。その居住区は、かつてのカストルム（城塞）の囲いの外側へと、すでにかなり前から大幅に広がっており、2つの主要道路軸、カルド・マクシムスとデクマヌス・マクシムスによって区切られていた。後者は、オスティエンセ街道が市内に続いたもので、都市西部で二股にわかれ、1本は、まっすぐテヴェレ川河口へ向かって（ヴィア・デッラ・フォチェ）、そしてもう1本は、海岸へ向かっている。この枝分かれは、オスティアの誕生・発展そして繁栄を決定づけた2つの要素、すなわち川と海の、都市における反映に他ならない。

城壁には3つの門が開いている。通称（現代の呼び名で）ポルタ・ローマーナ（ローマ門）、ポルタ・ラウレンティーナ（ラウレンティウム門）、そしてポルタ・マリーナ（海洋門）である。これらの門から都市を出る3つの道が伸び、それぞれオスティアとローマ（オスティエンセ街道）、ラウレンティウム地域そして正面の古代の海岸地域とを結んでいた。

紀元前1世紀を通して、その他戦争に関わる出来事とその植民地（オスティア）に及んだ。内戦の最中であった前87年には、マリウスによって占拠され、略奪された。前67年には、テヴェレ河口に停泊していた艦隊をも壊滅したキリキアの手による襲撃が記録されている。このエピソードは、キケロその人によって悼まれ、おそらくこの遺憾な出来事のために、後の彼の執政官の年に、（彼は）この植民地（オスティア）を守る城壁の建設を命じさせる対抗策を採ったと思われる。この時期、この小都市（オスティア）の統治基準もまた、地元の二人の行政官、二人委員（*duoviri*）によって治められ、決定的に強化された。

共和政時代末期には、オスティアは活気のある商業の中心地として、倉庫やタベルナ（店舗）、居住区中央部と北部の諸神殿、海に最も近い南西部のアトリウム（中央広間）とペリステリウム（中庭）を有する洗練された住居などによって形成されていた。諸ネクロポリスは、ポルタ・ローマとポルタ・ラウレンティーナの外側に広がっていた一方、海岸近くのポルタ・マリーナの向こう側では、名門の人々を舞台背景のごとく記念するため、ただ2つの記念的葬礼建物が岐立していた。

帝政時代

帝政初期、オスティアの海岸に真の港を整備する必要があると認識された。なぜなら、首都によって運営される海上交易量が、川港の簡素な構造ではもはや間に合わぬほど多く、何よりも諸船に安全な収容場所を保障するには不十分であった。その上、河口付近に自然の入り江（湾）がなかったため、小船が川へと入る操縦は、悪天候の中では困難だったはずである。同じ問題のために、大型の貨物船（船の容量のため、川を遡ることはできなかった）の貨物の荷降ろしは、オスティアやローマまで輸送可能な小型の川船の上で行わざるを得なかった。

海港を建設する計画は、カエサルが着想し、おそらくアウグストゥスも考えたであろうが、それを実行に移したのはクラウディウス帝であり、紀元後42年のことであった。クラウディウス帝は、テヴェレ河口の北2マイルのある地域、現在のフィウミチーノ市の領域、今日のレオナルド・ダ・ヴィンチ空港近くに設置しようとした。ネロ帝時代になって完成したその事業は、

しかしながら、停泊する船に（また大規模な侵攻に対しても）安全な収容場所を保障できないという、著しい技術的欠陥がすぐに明らかとなった。それゆえ、トラヤヌス帝は、おそらく 106 年から 113 年の間に六角形の、より内部の、そのためより保護された、そして人工の運河（現フィウミチーノ運河に相当）によってクラウディウス帝の港と連結された第二の湾を建設した。港湾施設として建設されたその複合体は、3 世紀後半から徐々に本物の都市へと変化しながら、ローマへ直行する商品の選別や倉庫貯蔵という基本的な機能を発展させながら、オスティアそのものよりも、海上交易の主要な終着駅となった。その重要性は、コンスタンティヌス帝時代には、*フラウィウス・コンスタンティヌス・ポルトゥス市*（*Civitas Flavia Costantiniana Portuensis*）という名を冠した、行政自治を獲得した小都市にならしめた。

ともかく、その港の建設は、新しい港の中心地に多くの商業活動を移動させる結果となったが、少なくとも 3 世紀初頭までは、経済・社会的側面においても、都市の側面においても、オスティアの衰退をなんら引き起こしたわけではなかった。むしろ、この都市（オスティア）の重要性は増したと思われる。なぜなら、新しい港施設の傍には明らかにまだ形成されていなかった行政や交易に関わる構造がオスティアにはすでに存在し、それらをすぐに増強する必要があったと考えられるからだ。他方、新しい港（地中海で最も大きな港）を十分に組織するためには——たとえば、商品貯蔵用の倉庫、穀物供給管理のための行政事務所、そして単純ではあるが不可欠な代表者の座など、商業活動に関わるこのような一連の機関を設置などを通して——時間が必要であったことは明白である。1 世紀末から 2 世紀初頭の間、おそらく商品の倉庫用のフォールムか広場の役割を果たす、不規則な半円形の一種の空間が造られた。

2 世紀半ばの十年、オスティアは、隆盛かつ人口の多い（約 5 万人の住人がいたと算出されている）中心地となり、とりわけ商人、旅行者、船主、農民らが往来した。直接的にせよ間接的にせよ、経済と商業活動の発展は、皇帝たちの港があったおかげであり、新しい中産階級の就労者と商人の成功をうながさずにはおれず、皇帝たちの影響はオスティアの都市化と建築の発展においても明白であった。何よりもまず、フォールムとカピトリウム（120 年）を建てた。それ以前には、簡素で小規模なものでなければ、フォールムは存在しなかった。続いて、新しい浴場、穀物倉庫（ホレア *horrea*）、職業組合の壮麗な活動拠点（スコラ *scholae*）、そして賃貸用の大型の共同住宅（インスラ *insulae*）を建設した。きちんとした管理計画に基づき、小都市（オスティア）内の地区、とりわけテヴェレ川左岸の埠頭や係留地近くの都市北部が設計された。劇場近くでは、通称「ピアッツァーレ・デッレ・コルポラツィオーニ（協力の広場）」がモニュメント化された。この広場は大きく、長方形の形をしており、その 3 つの側面は大柱廊で囲まれており、属州からの商品の輸入分野が扱われるポイントとなった。広場は、商人たちや船主たちが、地中海（とりわけアフリカの）の様々な属州からの商品輸送を組織する商談を行うフォールムの一種という本質を持っていた。

セウエルス朝時代には、とりわけ海上交易の強化に力点がおかれ、最後のオスティア優遇措置が記録されている。劇場が拡張され、デクマヌス通りに面したその入り口近くに、名誉な記念的アーチが建てられた。とりわけ、テッラチーナの港とオスティアを結ぶセヴェリアーナ街道が建設された。「ピアッツァーレ・デッレ・コルポラツィオーニ」では、その商業的特徴がより際立ち、柱廊のより内部に諸事務所が建設され、そこで当事者たちが自らの商業活動を宣伝した。この時期この都市（オスティア）を盛り上げた建築および商業活動の激化は、連携かつ

綿密に組織された仕事をもたらし、コルポラ corpora や コレギア collegia と呼ばれる建設業者・パン屋・船頭・船主・商人などの集合体である職人連合の分野で運営された。

ゴルディアヌス帝（238－244 年）もまた、称賛に値する消防団のためにオスティアへの関心を示した一方、アウレリアヌス帝（270－275 年）は、海岸から程遠からぬ場所に、彼の名前を冠したあるフォーラムを建てさせようとした。最後に、タキトゥス帝（275－276 年）は、一本 23 ピエーデ（6.7 m）以上のヌミディア産の大理石柱 100 本をその植民地（オスティア）に寄贈した。

しかしながら、オスティアの衰退は、3 世紀半ばからはじまったと思われる。（その原因は、）帝国全土を襲った一般的な政治・経済危機によるものと、より特殊には、その重要性がポルトゥス——もはやあらゆる商業活動がそこに移動した——に引き継がれたためと思われる。その都市（オスティア）は、あらゆる経済活力を失っていた。大部分の倉庫 horrea、賃貸共同住宅 insulae、そしていくつかの重要な建物——穀物倉庫を火災から護衛することが主な任務であった消防団の宿舎など——の放棄が示すように。しかし、危機の印は、約 1 世紀間オスティアの経済的・商業的繁栄の象徴であった複合体が放棄されたことによって示されている、すなわち「ピアッツァーレ・デッレ・コルポラツィオーニ」である。ここに至って、地元の極めて重要な人物（通常商業活動に結びついた人物）を讃える彫像が立てられなくなっただけでなく、4 世紀半ば頃には、劇場を修復する必要が出たために、あろうことか、そのピアッツァーレの彫像そのものの碑文付台座を使って（劇場の）壁の裂け目を塞いだのだった。オスティアは、居住地の中心となったが、その住居は、かつてのように人口が多い賃貸用共同住宅ではなく、むしろ洗練された、庭とニンフェウム（泉）を有する高さのある一戸建ての邸宅（domus）であった。しばしば、これらの住いを建てるために、元あった店舗（tabernae）の施設を破壊する必要があった。これは偶然ではなく、商業を襲った危機がもはや元に戻せない、重大なものであったことを証明する。これらの邸宅の所有者たちは、おそらく元老院階級の重要人物であり、ポルトゥスに商業上の権益を有する人々であったと思われるが、それでも一年のうちのいくらかの期間、より静かで高貴なオスティアに滞在することを好んでいた。ともかく、危険でいっばいの都市という想像は、見当違いである（それゆえマクセンティウスが 312 年に造幣所をそこに移した）。なぜなら、4 世紀において、極めて重要な建物のいくつかは、穀物長官の仲介によって修復の対象となったからである。

劇場に加え、これについては上述したが、フォーラムの浴場が言及されている。この浴場は、もっとも広く重要なもので、ラゴニウス・ウィンケンティウス・ケルスス長官（385－389 年）によって一部が修復された。このような意味において、郊外でなければ、少なくとも都市（オスティア）の主要軸（デクマヌス）に沿ったところは、ニンフェウムや広場の設置、フォーラムの改修などによって、住人たちに（オスティアの）威厳のある様相を与えようと努めた。とりわけ、ポルタ・マリナ近郊の区域は、まだ活発で生き生きとしていたと思われる。なぜなら、セウエリアーナ街道が横切っているからで、先にみたように、この街道は、ポルトゥスから伸びる沿岸の商業用の主要幹線であったからである。

近年の発掘調査により、ポルタ・ラウレンティーナ傍の、聖ペテロ、聖パウロそして洗礼者ヨハネに捧げられた、コンスタンティヌス帝時代に建てられたキリスト教バシリカも特定された。またもう 1 つのバシリカが 4 世紀にポルタ・ラウレンティーナから程遠からぬ近郊一帯、

現在のピアナベッラ Pianabella に誕生したように、(当時) 栄えていたのはキリスト教共同体だったに違いない。

しかしながら、5 世紀初頭以降は、その都市（オスティア）の本当の、そして決定的な衰退が明らかとなり、詩人ルティリウス・ナマティアヌスによって、彼の悲嘆の限りが伝えられている。

6 世紀半ばには、歴史家プロコピウスが、すでに退廃し、あらゆるつながりが断たれた——テヴェレ川の航行は障害物で満ち、オスティエンセ街道はもはや森と化していた——オスティアの姿について示している。明らかに、このような時期、都市のごくわずかな部分にだけまだ往来があった一方で、居住区の大半は瓦礫の山のために縮小され、貧者のための埋葬地域のごとく再利用されていたはずである。

7 世紀以降は、敷地の決定的な放棄が始まり、わずかに残った住人が、徐々に都市（オスティア）の東の近郊へと避難した。この区域には、後に教皇グレゴリウス 4 世(827－844 年)が、サラセン人の襲撃に対抗する防御として要塞小都市グレゴリオポリスを建てさせた。

【参考文献】

オスティアに関する文献は多く、紙幅の都合上ここですべてに言及することは不可能である。このため、論題にかかわる基本的な文献を示すにとどめる。

概説

- L. Paschetto, *Ostia colonia romana, storia e monumenti*, Roma 1912
- R. Meiggs, *Roman Ostia* (2° ed.), Oxford 1973.
- C. Pavolini, *Ostia*, Roma-Bari 2006
- C. Pavolini, *la vita quotidiana ad Ostia*, Roma-Bari 2006

個別の記念物、様々な素材について

- Serie degli “Scavi di Ostia” (I, 1953-....)
- Serie “Itinerari Ostiensi”(I, 1977-...)

碑文史料

- H. Dessau, *Corpus Inscriptionum Latinarum*, XIV, Berlin 1887
- L. Wickert, *Corpus Inscriptionum Latinarum*, XIV suppl., Berlin 1930
- M. Steinby, *Lateres signati Ostienses* (*Acta InstRomFinl* 7), 1977-78
- L. Vidman, *Fasti ostienses*, Pragae, 1982

-M.Cébeillac Gervasoni-M.L.- Caldelli- F. Zevi, *Epiografia latina. Ostia: cento iscrizioni in contesto*, Roma 2010

展覧会カタログ

-A.Pellegrino (a cura di), *Dalle necropoli di Ostia. Riti ed usi funerari*, Roma 1999

- J.P.Descoedres (a cura di), *Ostie.Port et porte de la Rome antique*,Genève 2001

会議（議事録）

-A. Gallina Zevi- A. Claridge, *Roman Ostia revisited*, Roma 1996

-C. Brunn- A.Gallina Zevi, *Ostia e Portus nelle relazioni con Roma(ActaInstRomFilnl 27)*, Roma 2002.

- A.Gallina Zevi - J.H. Humpphrey, *Ostia, Cicero, Gamala, Feasts, & the Economy. Papers in mempry of the John D'Arms*, Portsmouth, Rhode Island, 2004

（翻訳：藤井 慈子）

Veduta aerea, dell'area Archeologica di Ostai Antica



Ostia Antica. Complesso abitativo prima e dopo il diserbo

